

厚生労働科学研究費補助金【エイズ対策政策研究事業】
HIV 検査体制の改善と効果的な受検勧奨のための研究
HIV 検査体制の改善に向けた戦略研究（今村顕史）総合報告書

繁華街の若者における HIV/STI 検査行動に関する研究

◎研究協力者 日高 庸晴（宝塚大学看護学部）
研究協力者 土屋 菜歩（東北大学東北メディカル・メガバンク機構）
研究分担者 今村 顕史（東京都立駒込病院感染症科）

研究要旨

令和 4～6 年度に都市部深夜の繁華街に集う若者を対象にした行動疫学調査を実施した。過年度調査から実施している札幌と大阪で継続実施すると共に、令和 5 年からは調査定点として名古屋を加えた。質問票は HIV/STI 知識・意識や過去 6 ヶ月間の性行動、HIV 抗体検査および梅毒検査の生涯受検歴、U=U や PrEP に関する項目等によって構成、それぞれの都市で協力を得たクラブ店舗で、研究参加に同意を得たクラブ来訪者を対象とした。各自のスマートフォンで QR コードを読み込み、無記名自記式質問票を Web で回答する仕組みとした。令和 4 年度の有効回答数は 573 件（有効回収率 89.9%）、5 年度の有効回答数は 999 件（有効回収割合 98.2%）、令和 6 年度の有効回答数は 922 件（有効回収率 97.9%）であった。主な知見は以下の通りである。

- ・ HIV/STI 知識項目のうち女性だけに尋ねた項目がある。「HIV 検査では、内診（婦人科や産婦人科での膣の診察）がある」の正答割合は 10.5%～18.2%、男性だけに尋ねた「HIV 検査ではペニスの診察がある」の正答割合は 21.6%～26.3%であった。HIV 抗体検査に関する基本情報が圧倒的に浸透していないことが過年度同様に示された。
- ・ HIV 抗体検査の生涯経験は男性 8.4%～15.0%、女性 4.6%～17.2%であった。
- ・ 過去 6 か月間のセックス経験割合は男性 65.4%～78.9%、女性 59.7%～73.1%であった。
- ・ 過去 6 か月間の膣性交でのコンドーム常時使用割合は男性 38.0%～52.3%、女性 25.0%～48.6%であった。
- ・ U=U について知っている者は年齢階級別で男性 9.2%～18.3%、女性 6.7%～19.5%であった。
- ・ PrEP について知っている者は年齢階級別で男性 11.2%～19.5%、女性 4.3%～15.8%であった。

A. 研究目的

HIV や梅毒をはじめとする性感染症（以下、STI）の流行が確認されており、とりわけ梅毒は若年層に感染拡大していることがわかっている。また、コロナ禍において HIV/STI 検査の受検機会が著しく減少した。HIV/STI 対策を推進するうえで、実態を把握する疫学調査が必須だが、都市部繁華街に集積する若年層の HIV/STI 検査経験や感染リスク行動とその背景要因を探ることが可能な、

セクシュアルヘルスに関する疫学データはわが国に十分でない。よって本研究の目的は、若年層の HIV/STI 検査勧奨に資するために、知識・意識・行動に関する行動疫学調査を行い、実態を明らかにすることである。

B. 研究方法

過年度から調査実施の協力を得ている札幌・大阪のクラブ店舗に加えて、令和 5 年度からは名古屋

屋のクラブが研究フィールドとして追加になった。研究対象はそれぞれの都市のクラブ店舗に來訪する 18 歳以上の男女であり、無記名自記式質問票による行動疫学調査を実施した。調査実施時間のコアタイムは 22 時～1 時と設定し、調査員がクラブ店頭で來場客をリクルート（調査参加への声掛け）、研究参加に関心を持った者に液晶画面に示した QR コードを各自のスマートフォンで読み取るよう促し、オンラインアンケートの研究参加を得た（回答所要時間は 5 分程度）。回答終了者には謝品としてクラブ店内で当日使用可能なドリンクチケット（700 円相当）を 1 枚手渡した。

質問票構成内容：基本属性（年齢、性別、恋愛対象となる性別）、クラブ利用目的、HIV/STI 一般知識、HIV 抗体検査・梅毒検査受検歴、過去 6 ヶ月間の性行動（セックス人数、相手の種別、コンドーム使用状況）、STI 既往歴、U=U や PrEP に関する項目、sexting（セクスティング：インターネットや SNS で性的な文章や画像のやり取り）の経験割合を尋ねる質問項目等とした。

（倫理面への配慮）

質問票サイトは Secure Socket Layer (SSL) によって保護され、回答データが暗号化されてサーバへ送信する仕組みとし、情報漏洩を防ぐ手段とした。研究参加者をクラブ店頭でリクルートする際は、口頭や液晶画面での説明と共に、あくまでも任意の参加であることを伝えた。研究計画は宝塚大学看護学部研究倫理委員会による審査および承認のうえ研究を実施した。

C. 研究結果

研究参加者の基本属性

令和 4（2022）年度の回収数は 637 件、有効回答数は 573 件（有効回収割合 89.9%）であった。男性 340 人、女性 233 人であり平均年齢は 25.5 歳（18-57 歳）であった。最終学歴は大学在学中・卒業が 40.0%（男性 46.2%、女性 30.9%）、大学院在学中・修了が 9.1%（男性 11.2%、女性 6.0%）であった。

令和 5（2023）年度は 1,017 件の回収があり、有

効回答数は 999 件（有効回収割合 98.2%）であった。男性 627 人、女性 372 人であり平均年齢は 25.1 歳（18-58 歳）であった。最終学歴は大学在学中・卒業が 34.8%（男性 37.8%、女性 29.8%）、大学院在学中・修了が 5.5%（男性 7.2%、女性 2.7%）であった。

令和 6（2023）年度は 942 件の回収、有効回答数は 922 件（有効回収率 97.9%）であった。男性 588 人、女性 334 人であり平均年齢は 25.3 歳（18-60 歳）であった。最終学歴は大学在学中・卒業が 32.5%（男性 34.7%、女性 28.7%）、大学院在学中・修了が 4.9%（男性 5.3%、女性 4.2%）であった（図 1-2）。

HIV/STI 知識

「性感染症にかかっていると HIV に感染しやすい」の正答率は調査実施都市ごとに経年的に検証したところ、大きな変化はなく男性の正答割合は 32.0%～41.5%、女性で 21.2%～34.0%であった。HIV 易感染についての知識よりも「性感染症に感染しても症状が出ないことがある」の正答割合がやや高めであり 4 割程度であった（図 3）。

「その日のうちに結果がわかる HIV 検査がある」の情報は男性で 26.4%～37.3%、女性では 15.2%～27.1%の浸透度合いであった（図 4）。

女性だけに尋ねた項目である「HIV 検査では、内診（婦人科や産婦人科での膣の診察）がある」の正答割合は 10.5%～18.2%であり、少量の血液検査で検査が行われている基礎的な知識が過年度同様に全く浸透していなかった。男性のみに尋ねた「HIV 検査では、ペニスの診察がある」の正答割合は 21.6%～26.3%であった。男性・女性共に検査とは何か、どのような検査手法であるのかといった基礎的な情報の欠如が明らかであり、誤解が生じているため、予防啓発に先ずは取り入れる必要がある情報であろう（図 5）。

HIV 抗体検査および梅毒検査

HIV 抗体検査の生涯経験は男性 8.4%～15.0%、女性 4.6%～17.2%であった（図 6）。

梅毒検査の生涯受検歴は男性 7.0%～14.7%、女性 7.5%～18.3%であった（図 7）。MSM の生涯

受検割合に比するといずれも低率であることが示されている。

過去 6 か月間の性行動

過去 6 か月間のセックス経験率は男性 65.4%～78.9%、女性 59.7%～73.1%であり、地域差や年齢差はなかった（図 8）。

コンドーム常時使用状況

膣性交におけるコンドーム常時使用割合は、男性 38.0%～52.3%、女性 25.0%～48.6%であった。回答地域によって傾向が異なる場合もあるが、概ね過年度と同様に横ばい傾向であった（図 9）。

U=U と PrEP の浸透度合い

U=U について聞いたことがある割合は男性 9.2%～18.3%、女性 6.7%～19.5%であった（図 10）。PrEP については男性 11.2%～19.5%、女性 4.3%～15.8%に浸透していることが示唆され、いずれも低率であった（図 11）。

D. 考察

HIV 流行当初はエイズ予防教育指定校など公的に設置されたことがあり、その後も学校を主体に質問票調査や教育が多くされてきた。ポピュレーションアプローチの視座からは重要な取り組みであるが、一方で学校だけの取り組みでは若者の中でも性行動の頻度やセックスパートナーの人数が多い、比較的ハイリスク層の実態を把握することは困難である。また、都市部の深夜の繁華街に集積する若者の性行動調査を継続実施する試みは本研究以外に類似するものがなく、当該集団のセクシュアルヘルスの実態把握に資する疫学データとなっている。

質問票の回答は対象となる 20 代が大半を占め、本研究のターゲットポピュレーションからの回答を得ることが出来た。セックスパートナーの性別は男女共に異性が 9 割方であったが、同性や男女両方といった回答も一定数確認された。本稿では膣性交時におけるコンドーム使用行動に着目して集計したが、セックスパートナーが同性や男

女両方である者の行動についても、今後、精査していく必要があるだろう。

HIV/STI 一般知識の正答割合はいずれの地域においても概して低率であった。過年度調査同様に、女性において HIV 抗体検査は内診で行われているといった誤解や、男性では HIV 抗体検査では性器の検査が伴うという誤解が依然として高率であり、基礎的な情報が圧倒的に不足していることが改めて確認された。加えて、U=U や PrEP についてはほぼ知られておらず、HIV/STI にかかる最新の情報も加えた包括的な情報提供が求められるだろう。その一方で、過去 6 ヶ月間のセックス経験割合は 7 割前後であり、その大半の者が複数のセックスパートナーを有していた。膣性交時におけるコンドーム常時使用状況を尋ねたところ、常時使用割合は男性女性ともに 50% 未満であった。

今後は定点モニタリング調査を継続するとともに、当該集団の感覚や感性に応じた、実際的な情報提供や予防啓発を積極的に実施していく必要がある。来場者全員がスマートフォンを所持していることから、ショート動画や大きく太い文字フォントを多用したインパクトのある動画などによる予防介入策の立案が求められる。同時に、STI 症状自覚時の診療や相談機関、受検場所の情報が盛り込まれた、すぐに役立つ情報をパッケージ化していくことも検討が必要であろう。

E. 結論

継続した調査（モニタリング）の実施によって、都市部繁華街に集う若者の性行動/セクシュアルヘルスの現状が明らかになった。また、HIV/STI の基礎的な知識や情報、感染リスク行動や受検行動が示された。今後は予防的保健行動の促進や積極的な受検勧奨のための予防介入が急がれる。

F. 研究発表

なし

G. 知的所有権の取得状況

なし

図1. 最終学歴

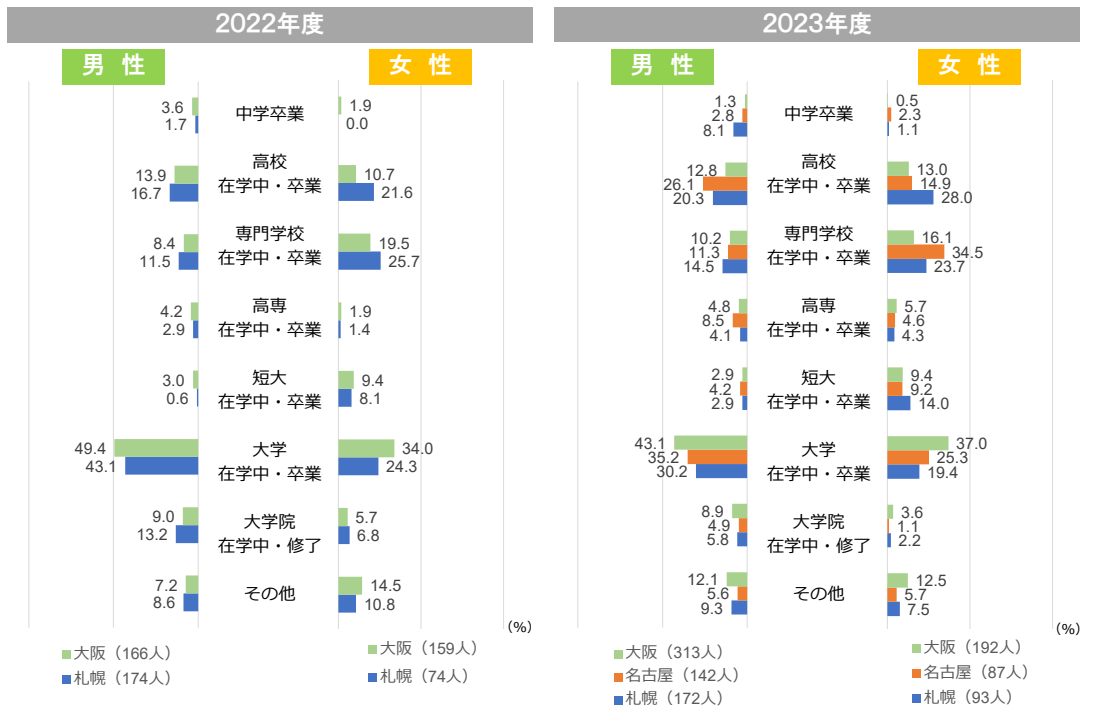


図2. 最終学歴

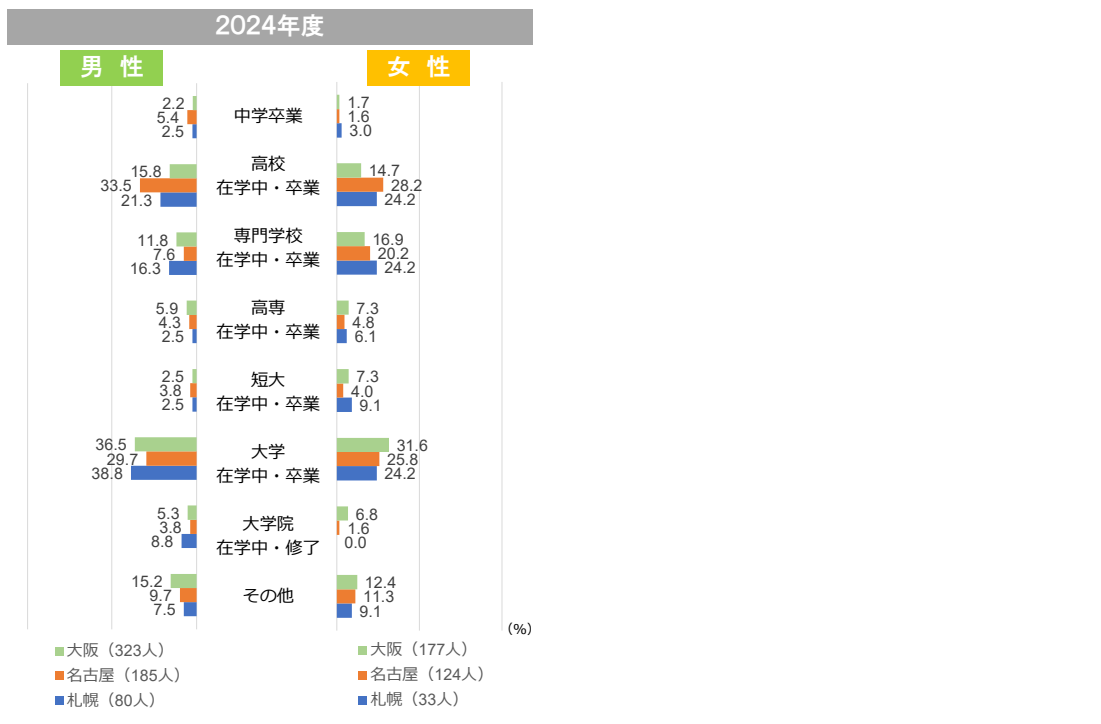


図3. 知識(正答割合)

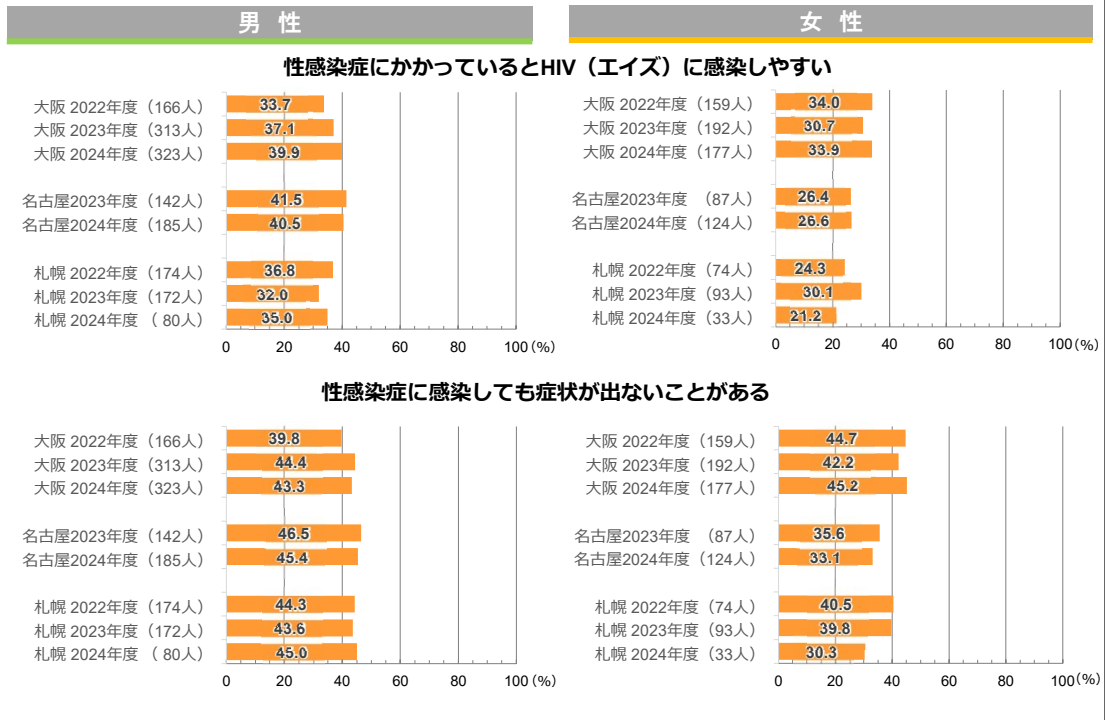


図4. 知識(正答割合)

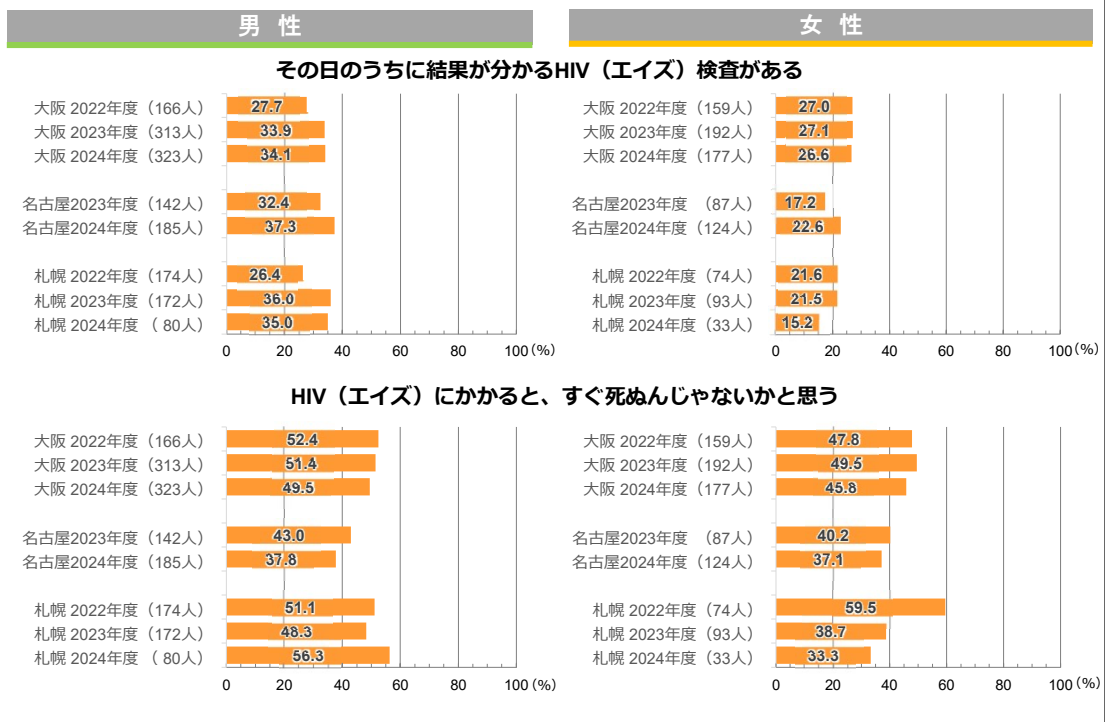


図5. 知識(正答割合)

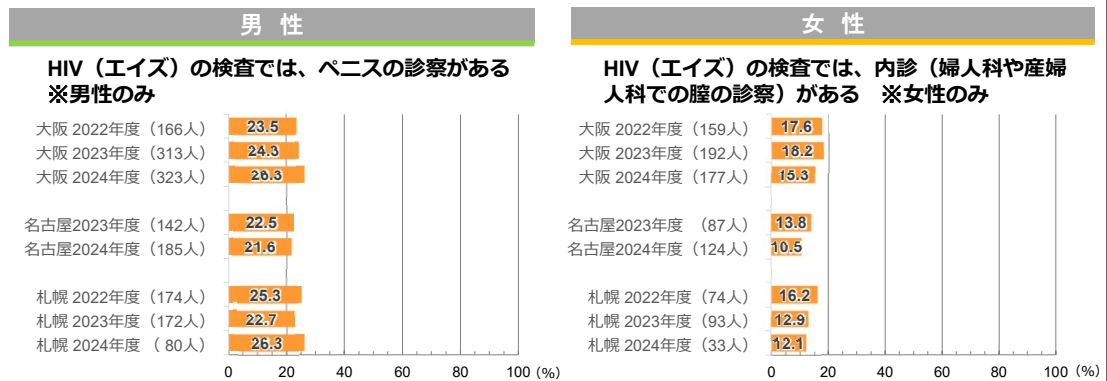


図6. HIV抗体検査生涯受検割合

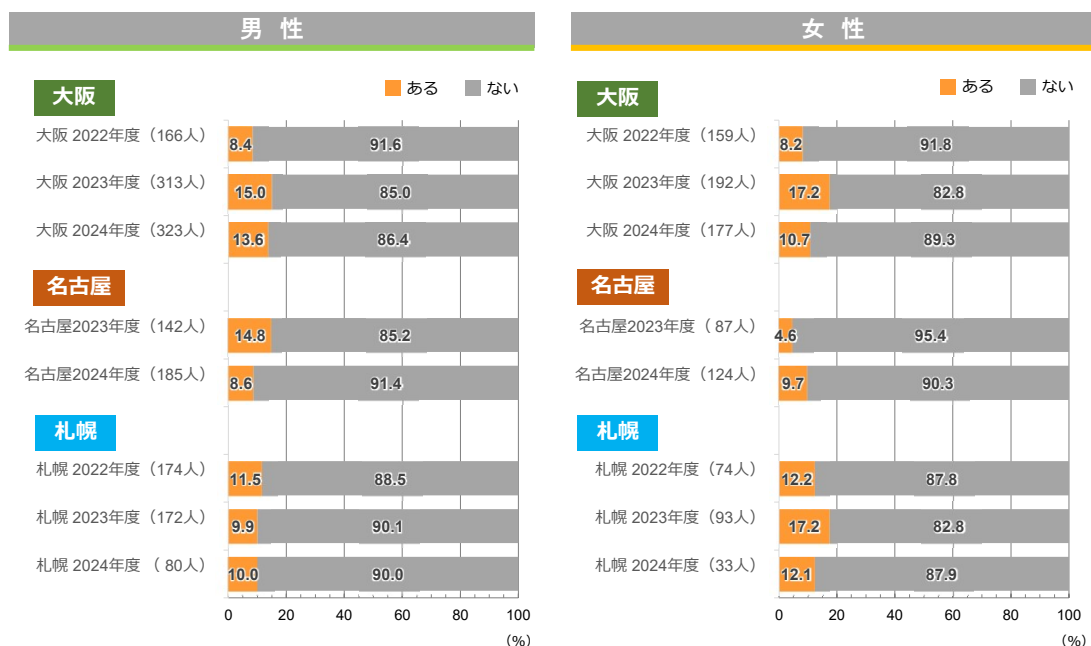


図7. 梅毒検査生涯受検割合

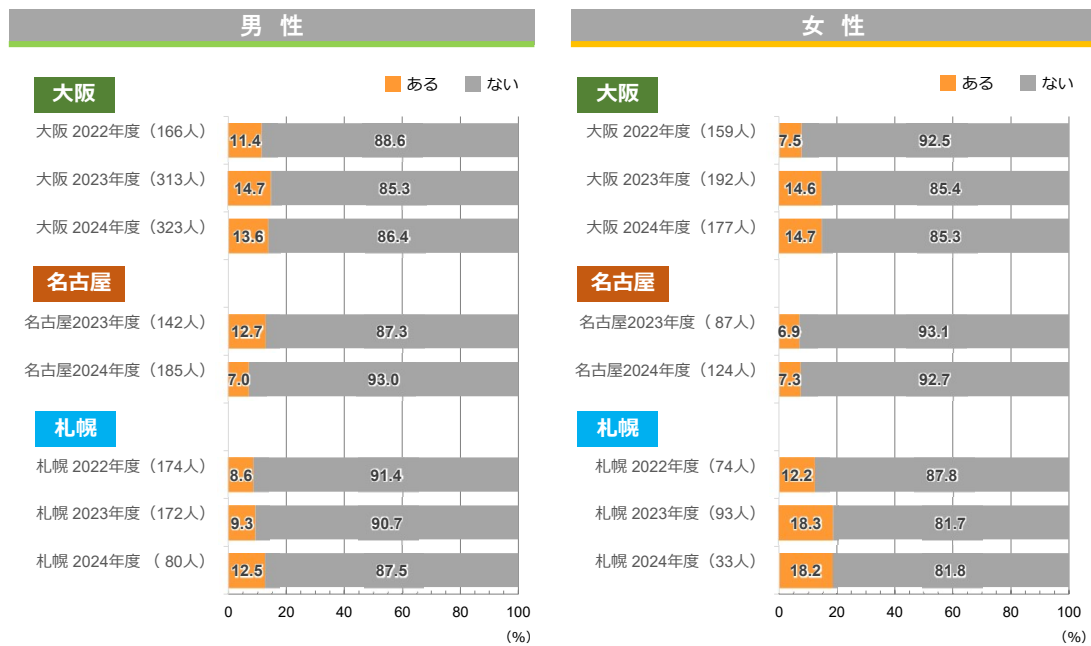


図8. 過去6ヶ月間のセックス経験割合

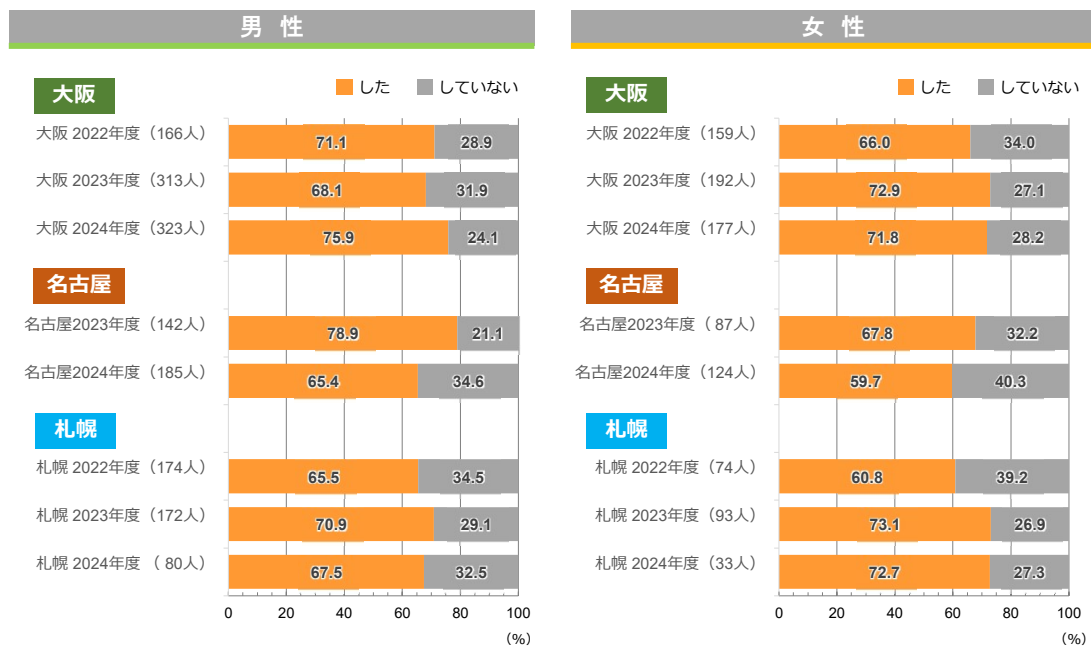


図9. 過去6ヶ月間の膣性交におけるコンドーム常時使用割合

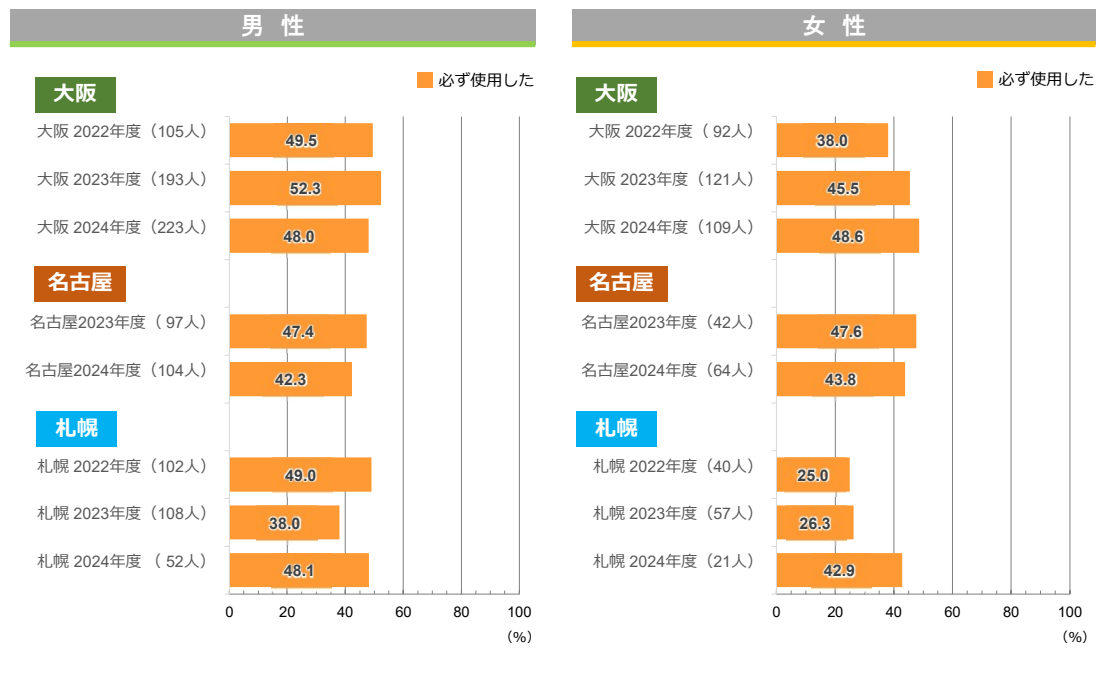


図10. U=Uについて聞いたことがあるか

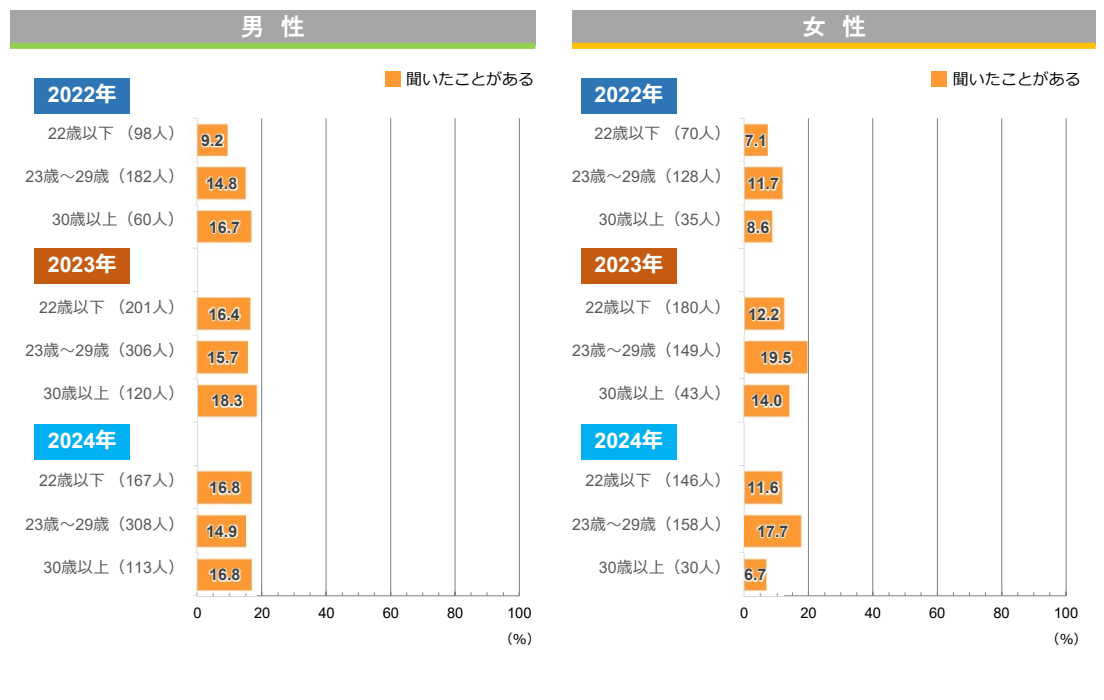


図11. HIVに感染していない人が、セックスの前にHIV治療薬を飲むことでHIVを予防すること(PrEP:プレップ)を聞いたことがあるか

